



倉田和四生教授

## 倉田和四生教授略歴・主要業績

### —略 歴—

#### 学 歴

- 昭和4年7月 熊本県で生まれる  
昭和26年3月 長崎市立高等学校卒業  
昭和30年3月 関西学院大学文学部社会学科卒業（文学士）  
昭和32年3月 関西学院大学大学院文学研究科社会学専攻修了（文学修士）  
昭和40年7月～昭和42年8月  
米国マサチューセッツ大学に留学（フルブライト・スカラーシップ）  
昭和46年2月 関西学院大学文学博士を受ける

#### 職 歴

- 昭和30年4月 関西学院大学文学部社会学科嘱託助手補  
昭和32年4月 関西学院大学文学部社会学科専任助手補  
昭和33年4月 関西学院大学文学部社会学科専任助手  
昭和35年4月 関西学院大学社会学部専任講師  
昭和39年4月 関西学院大学社会学部助教授  
昭和46年4月 関西学院大学社会学部教授  
昭和48年4月 関西学院大学大学院社会学研究科修士課程指導教授  
昭和48年9月 米国ニューヨーク市立大学研究員（ACLS フェローシップ 1年間）  
昭和51年4月 関西学院大学社会学部長（昭和57年3月まで）  
昭和52年6月 関西学院大学大学院社会学研究科博士課程指導教授（社会学専攻）  
昭和53年4月 関西学院大学大学院社会学研究科博士課程指導教授（社会福祉学専攻）  
昭和57年9月 カナダ・トロント大学研究員（カナダ・カウンシル フェローシップ 1年間）  
昭和58年10月 学校法人関西学院院長代理（平成元年3月まで）  
昭和61年4月 学校法人関西学院評議員（平成元年3月まで）  
昭和61年4月 学校法人関西学院理事（平成元年3月まで）

### —学会および社会における活動—

- 日本社会学会会員  
日本都市学会理事  
日本都市社会学会理事  
日本人口学会会員  
近畿都市学会理事  
神戸市総合計画審議会委員  
神戸市市民福祉調査委員会委員  
神戸市都市制度調査委員会委員

神戸市総合基本計画審議会委員  
 西宮市総合計画審議会委員  
 宝塚市総合計画審議会委員  
 二十一世紀ひょうご創造協会研究指導者  
 兵庫2001年委員会委員  
 文部省学術審議会専門委員会委員  
 三田市教育委員

**賞 罰**

昭和47年5月 第2回奥井賞(拙著「都市化の社会学」に対する出版賞)日本都市学会より  
 昭和60年9月 防災功労(学術研究)賞 神戸市長より

**一著 書・学術論文一**

**(著 書)**

都市化の社会学	法律文化社	昭和45年6月
都市コミュニティ論	法律文化社	昭和60年5月
北米都市におけるエスニック・マイノリティ —多民族社会の構造と変動—	ミネルヴァ書房	平成9年3月
防災福祉コミュニティの構想と展開	田中印刷出版社	平成9年3月

**(編 著)**

長寿社会の展望と課題(共編)	ミネルヴァ書房	平成5年3月
----------------	---------	--------

**(分担執筆)**

都市化と大都市圏の発達	地方行財政入門 晃洋書房	昭和48年1月
工業化と大都市圏の発達	新しい労働者の研究 白桃書房	昭和48年5月
反社会集団	現代社会病理学第7章 川島書店	昭和48年6月
解体地域	社会学シリーズ第7巻 福祉 有斐閣	昭和52年5月
大都市とコミュニティ	コミュニティ行政の 理論と実践 勁草書房	昭和54年2月
高齢化と地域福祉のシステム化	高齢者福祉の理論と実践 勁草書房	昭和61年2月
移民(人種・民族)と都市問題—その夢と現実—	アメリカ 啓文社	昭和62年3月
コミュニティ研究とシステム論	都市化の社会学理論 ミネルヴァ書房	昭和62年9月
社会システムとしての町内会	町内会と地域集団 ミネルヴァ書房	平成2年9月
移民、人種および都市問題の現状と展望	アメリカの現状と展望 啓文社	平成2年9月

現代アメリカ社会の亀裂	さまざまなアメリカ 啓文社	平成6年3月
比較都市文化論	比較文化論 世界思想社	平成7年9月
(翻 訳)		
J. M. ビッシャーズ 人口と社会システム	鹿島出版社	昭和46年6月
パーク他 都市—人間生態学とコミュニティ論— (共訳)	鹿島出版社	昭和47年10月
C. A. ベリー 近隣住区論—新しいコミュニティ計画のために—	鹿島出版社	昭和50年11月
T. パーソンズ 社会システム概論	晃洋書房	昭和53年6月
T. パーソンズ 社会システムの構造と変化	創文社	昭和59年5月
カナダ多民族社会の構造—なゼエスニック集団は存続するか— (共訳)	晃洋書房	平成6年4月
(分担翻訳)		
近隣・都市生態学・都市計画家	都市化の社会学 第14章 誠心書房	昭和40年9月
T. パーソンズ 現代社会における大学の諸問題	関西学院大学社会学部 創立20周年記念論文集	昭和55年3月
(学術論文)		
最近アメリカに於ける文化人類学の一般的傾向 (共同執筆)	関西学院社会学 第2輯 関西学院大学 文学部社会学科	昭和31年5月
社会システム論研究	関西学院社会学 第3輯 関西学院大学 文学部社会学科	昭和32年10月
かくれ切支丹の組織と村落構造	関西学院社会学 第4輯 関西学院大学 文学部社会学科	昭和33年12月
構造機能分析の展開 (その1)	人文論究 第9巻4号 関西学院大学文学部	昭和34年3月
T. パーソンズに於ける「経済」と「社会」	社会学評論 第35号 日本社会学会	昭和34年3月
かくれ切支丹の復活と村落構造	関西学院社会学 第5輯 関西学院大学 文学部社会学科	昭和34年9月
構造機能分析の展開 —T. パーソンズ研究 (その1)—	社会学部紀要 創刊号 関西学院大学	昭和35年11月
T. パーソンズの動態論について	社会学部紀要 第3号 関西学院大学	昭和36年9月
社会的行為の枠組と構造機能的アプローチ	論 攷 第8号 関西学院大学	昭和36年11月
組織理論の基礎問題—T. パーソンズ研究—	論 攷 第9号 関西学院大学	昭和37年11月
T. パーソンズ理論の展開	社会学部紀要 第6号 関西学院大学	昭和38年3月

主意主義的行為の構造— T. パーソナル研究—	論 攷 第10号 関西学院大学	昭和38年10月
信仰組織と部落構造	社会学部紀要 第8号 関西学院大学	昭和39年1月
近代化論と社会システム変化論についての覚書	社会学部紀要 第9号 関西学院大学	昭和39年11月
神戸市における人口の集中と拡散	社会学部紀要 第11号 関西学院大学	昭和40年8月
郊外における住民組織	社会学部紀要 第12号 関西学院大学	昭和40年12月
人口の近代化とアジアの人口問題	社会学部紀要 第16号 関西学院大学	昭和43年3月
日本都市の機能分類（1960年）（その1）	社会学部紀要 第17号 関西学院大学	昭和43年11月
アメリカ合衆国における都市化と黒人問題	論 攷 第15号 関西学院大学	昭和43年12月
日本都市の機能分類（1960年）（その2）	社会学部紀要 第18号 関西学院大学	昭和44年3月
都市化の理論—ワースとジョバーガー—	社会学部紀要 第19号 関西学院大学	昭和45年1月
阪神間六市一町の人口構造と流動パターン	社会学部紀要 第20号 関西学院大学	昭和45年3月
日本都市の機能分類（1965年）	社会学部紀要 第21号 関西学院大学	昭和45年11月
都市化と人間の危機	青少年問題研究 第18号 大阪府青少年問題研究会	昭和45年12月
人口社会学の構想	社会学部紀要 第22号 関西学院大学	昭和46年3月
都市化とコミュニティの諸問題	都市問題研究 7月号 大阪市都市問題研究会	昭和46年7月
工業化と大都市圏の発展	社会学部紀要 第23号 関西学院大学	昭和46年12月
逸脱行為と社会統制	社会学部紀要 第24号 関西学院大学	昭和47年1月
都市コミュニティ論	社会学部紀要 第25号 関西学院大学	昭和47年12月
大都市の住民自治組織	社会学部紀要 第26号 関西学院大学	昭和48年3月
新しい都市コミュニティのあり方を求めて	市政調査 第17号 神戸市	昭和48年3月
現代における都市化の意味	日本都市学会年報 7巻3編第1章 地人書房	昭和48年5月
人口と環境	医学のあゆみ 6月号 医歯薬出版株式会社	昭和48年6月
社会福祉行政と地域福祉活動	都市問題研究 第26巻 大阪市都市問題研究会	昭和50年6月

近隣住区理論の形成と発展	社会学部紀要 関西学院大学	第31号	昭和50年12月
大都市の地域住民組織とコミュニティの構造	社会学部紀要 関西学院大学	第32号	昭和51年3月
大都市コミュニティと市民	都市問題研究 大阪市都市問題研究会	第28巻	昭和51年10月
大都市の近隣関係	社会学部紀要 関西学院大学	第33号	昭和51年12月
大都市における財産区管理の実態（その1）	社会学部紀要 関西学院大学	第34号	昭和52年1月
人口および社会・経済的カテゴリーの日本比較 —ニューヨーク市と大阪・神戸市—	日本都市学会年報 地人書房	第11巻	昭和52年5月
公共施設の利用とコミュニティの構造	社会学部紀要 関西学院大学	第35号	昭和52年12月
都市的生活様式の特質	社会学部紀要 関西学院大学	第36号	昭和53年3月
大都市における財産区管理の実態（その2）	社会学部紀要 関西学院大学	第37号	昭和53年12月
人口転換と高齢化社会の到来	社会学部紀要 関西学院大学	第39号	昭和54年12月
地方都市の近隣関係—倉敷市—（共同執筆）	社会学部紀要 関西学院大学	第39号	昭和54年12月
都心の過疎化とコミュニティの諸問題 —大阪市の例—	社会学部紀要 関西学院大学	第40号	昭和55年3月
地域住民組織の現状と課題	都市政策 神戸都市問題研究所		昭和55年9月
都市化と地域社会の統合性	都市問題 都政調査会		昭和55年11月
釜ヶ崎における高齢者の生活実態	社会学部紀要 関西学院大学	第41号	昭和55年12月
日本のニュータウン（近隣住区） とコミュニティ活動	社会学部紀要 関西学院大学	第42号	昭和56年2月
都市化過程と消防団の役割—神戸市—	社会学部紀要 関西学院大学	第43号	昭和57年1月
町づくり運動のダイナミック・プロセス（1）	社会学部紀要 関西学院大学	第44号	昭和57年3月
町づくり運動のダイナミック・プロセス（2）	社会学部紀要 関西学院大学	第45号	昭和57年12月
芦屋浜ニュータウンのコミュニティ活動 （共同執筆）	社会学部紀要 関西学院大学	第45号	昭和57年12月
カナダにおける日系社会の構造と変化	社会学部紀要 関西学院大学	第47号	昭和58年12月
トロントにおける日系高齢者の施設と福祉活動	社会学部紀要 関西学院大学	第48号	昭和59年3月
トロントの日本語学校とヘリテージ （日本文化）の保持	社会学部紀要 関西学院大学	第49号	昭和59年12月

コミュニティの活性化と高齢者福祉	社会学部紀要 第50号 関西学院大学	昭和60年3月
都心の過疎化とコミュニティの活性化	都市計画 第136号 日本都市計画学会	昭和60年7月
(新明教授の) 行為理論の展開 —T. パーソンズとの関わりを中心として—	社会学評論 第142号 日本社会学会	昭和60年9月
近隣生活と地域住民組織の地域的特性	社会学部紀要 第51号 関西学院大学	昭和60年12月
住民組織と地域社会の構造 (その2)	社会学部紀要 第52号 関西学院大学	昭和61年3月
都市化社会における地域集団	日本都市学会年報 第20巻 地人書房	昭和61年
地域集団論の新しい展開	社会学部紀要 第54号 関西学院大学	昭和62年3月
大道安次郎博士の人と業績	社会学部紀要 第55号 関西学院大学	昭和62年7月
コミュニティの社会構造と児童の遊び場	社会学部紀要 第56号 関西学院大学	昭和63年3月
関西学院における社会学の歩み (その1)	社会学部紀要 第57号 関西学院大学	昭和63年10月
関西学院における社会学の歩み (その2)	社会学部紀要 第58号 関西学院大学	平成1年3月
変動期におけるコミュニティ形成の意義と課題	都市問題研究 463号 大阪市都市問題研究会	平成1年7月
高齢化の進行と地域社会の対応	社会学部紀要 第60号 関西学院大学	平成1年10月
鳴尾東地区のコミュニティ活動	社会学部紀要 第62号 関西学院大学	平成2年3月
大都市における自主防災ネットワークの形成	都市問題研究 477号 大阪市都市問題研究会	平成2年9月
公民館とコミュニティ活動	西宮都市政策論集2号 西宮市企画調整部	平成2年12月
地域福祉とボランティア活動	社会学部紀要 第62号 関西学院大学	平成3年3月
都市における地域組織化の三類型	Tomorrow19号 あまがさき未来協会	平成3年6月
人口社会学の分析枠組	社会学部紀要 第64号 関西学院大学	平成3年11月
人口移動論	社会学部紀要 第65号 関西学院大学	平成4年3月
現代中国の人口問題と北京の人口移動 (共同執筆)	社会学部紀要 第65号 関西学院大学	平成4年3月
現代中国における出生力抑制政策の展開	社会学部紀要 第66号 関西学院大学	平成4年10月
社会参加の余暇活動と自治体の役割	都市問題研究 504号 大阪市都市問題研究会	平成4年12月

人口と環境	社会学部紀要 関西学院大学	第67号	平成5年3月
上海市における出生抑制策の展開（共同執筆）	社会学部紀要 関西学院大学	第68号	平成5年10月
エスニシティの社会理論	社会学部紀要 関西学院大学	第69号	平成6年3月
エスニック・グループ間の生活格差	社会学部紀要 関西学院大学	第71号	平成6年10月
人口過程とエスニック・コミュニティ	社会学部紀要 関西学院大学	第72号	平成7年3月
都市的居住とコミュニティの形成	都市問題研究 大阪市都市問題研究会	534号	平成7年6月
阪神大震災とコミュニティ活動	社会学部紀要 関西学院大学	第73号	平成7年10月
震災と地域住民の対応	地域開発 日本地域開発センター		平成8年2月
アメリカ合衆国とカナダのエスニシティ比較論	社会学部紀要 関西学院大学	第74号	平成8年3月
イギリスのエスニック・グループとその生活機会	社会学部紀要 関西学院大学	第75号	平成8年10月
防災福祉コミュニティ の構想と展開（その1～8）	雪（神戸市消 防局広報誌） 神戸市消防局		平成8年8月号から 平成9年3月号まで

（書評）

神谷国弘「都市比較の社会学」	ソシオロジ 社会学研究会	第29巻1号	昭和59年5月
鈴木 広「都市化の研究」について	日本都市学会年報 地人書房	第21巻	昭和62年
藤田弘夫 他「都市・社会学と人類学からの接近」について	社会学評論 日本社会学会		昭和63年9月

（調査報告書）

地域住民組織の実態分析	勁草書房		昭和55年12月
神戸市消防団の意識と活動—その現状と課題	神戸市消防局		昭和56年3月
市民意識の実証的研究—近隣生活と地域組織の構造	21世紀ひょうご創造協会		昭和60年3月
高齢者福祉への政策ビジョン	神戸都市問題研究		昭和61年3月

（英文）

Decision Making among Japanese University Students（共同執筆）	関西学院大学 欧文紀要	第17号	昭和43年11月
Comparison of Social and Economic Characteristics between New York City and Two Japanese Cities	関西学院大学 欧文紀要	第24号	昭和50年12月
Comparison of Population Characteristics between New York City and Two Japanese Cities	関西学院大学 欧文紀要	第25号	昭和51年12月
Suburbanization of New York Metropolis	関西学院大学 欧文紀要	第26号	昭和52年12月



Migration in New York City	関西学院大学 欧文紀要 第27号	昭和53年12月
Racial Segregation in New York City	関西学院大学 欧文紀要 第28号	昭和54年12月
Racial Segregation in New York City—part 2—	関西学院大学 欧文紀要 第29号	昭和55年12月
Population Characteristics and Process of New York City	関西学院大学 欧文紀要 第30号	昭和56年12月
Racial Segregation in New York City—part 3—	関西学院大学 欧文紀要 第31号	昭和57年12月
The Social Structure and Change of Japanese Canadians	関西学院大学 欧文紀要 第32号	昭和59年3月

## 倉田和四生教授記念号によせて

社会学部長 牧 正 英

倉田 和四生先生は、1997年3月で定年前ではありますが、吉備国際大学へ着任されるため退職されることになりました。また、今後は、関西学院大学名誉教授として大学や学部の発展にお心をかけていただくこととなります。

倉田先生は1955年4月に本大学文学部に着任以来今日まで、39年の長きにわたって社会学部教育・研究ならびに学院の発展に尽くされました。これらのことに対して、学部一同深い感慨を覚えるとともに、先生のこれからのますますご発展とご健康をお祈りするものです。

倉田先生は、1955年関西学院大学文学部社会学科をご卒業後、同大学大学院文学部研究科社会学専攻に進まれ、1957年にはマサチューセッツ州立大学に留学し、都市社会学、社会学の勉学に努められました。また、先生は、1955年関西学院大学文学部社会学科嘱託助手に採用され、その後、1957年同大学文学部専任助手、そして、1960年に創設された社会学部の専任講師となり、1964年助教授、1971年教授になられました。そして、1971年に関西学院大学より文学博士の学位を授与されました。

大学院社会学研究科においては、1973年に前期（修士）課程指導教授、1977年後期（博士）課程指導教授に任用され、そして、1978年には後期課程社会福祉学専攻の指導教授にもなられ、20年以上にわたって大学院教育に尽くされました。

この間、1973年から1974年米国ニューヨーク市立大学研究員、1982年から1983年にカナダ・トロント大学研究員とされました。

倉田先生は、1976年から1982年までの3期6年間にわたって社会学部長、さらに、1983年から1989年までの6年間、学校法人関西学院院長代理、1986年から1989年の3年間、学校法人関西学院評議員ならびに関西学院理事として重責を担われました。

そして、社会学部長の時期に、理論社会学の第一人者であるアメリカのタルコット・パーソンズ教授を客員教授として1978年にお招きし、社会学部の大学院において集中講義、また、関西学院セミナー・ハウス開館記念セミナーにおいて講演がとり行なわれ、学内外での学問的な催しの水準を高められました。

先生は、日本社会学会会員、日本人口学会会員、日本都市学会理事、日本都市社会学会理事、近畿都市学会理事として学会活動に積極的に携われました。そして、1972年には、

日本都市学会より『都市化の社会学』（法律文化社、1970年）に対して、第2回奥井賞が授与されました。

社会における活動としては、文部省学術審議会専門委員をはじめ、兵庫県、神戸市、宝塚市、三田市の審議会や委員会などさまざまな活動に精力的に取り組んでこられ、1985年には、神戸市長より、防災功労（学術研究）賞を受けられました。

倉田先生の研究業績は、著書3、編著1、分担執筆12、翻訳6、分担翻訳2、学術論文90、その他書評、調査報告書、英文論文と非常に多く、パーソンズ研究をはじめとして、都市社会学、人口論、コミュニティ論と幅広い研究をすすめられ、常に学会の最先端にたってこられました。そして、近年には、先生のコミュニティ研究の集大成としての著書「北アメリカ・エスニック・マイノリティの研究—ニューヨークのマイノリティのトロントの日系コミュニティ—」が1997年の春にミネルヴァ書房より出版されようとしています。先生のみますますのご活躍とご健勝を念願する次第です。

最後に、倉田先生は、関西学院大学文学部社会学科ならびに大学院文学部研究科社会学専攻で同期生として、その後の研究領域は異なりましたが、先生は関西学院大学社会学部の初代学部長大道 安次郎先生の都市社会学の立派な後継者となられ、その研究姿勢や識見は私自身にとって大きな刺激になったことを申しそえさせていただきます。

## わが師 わが道\*

——関西学院大学 社会学 39年のあしあと——

倉 田 和 四 生

はじめに

- (1) 大道安次郎先生との御縁
  - (2) 竹内愛二先生と地域福祉
  - (3) マサチューセッツ大学と都市社会学
  - (4) ヨーキー教授とピッシャーズ教授（人口論）
  - (5) デューイ教授とファーバー教授（近隣住区論）
  - (6) パーソンズ教授と社会システム論
  - (7) ゴードン教授とライツ教授（エスニシティ）
- むすび

### はじめに

関西学院大学社会学部を退職するに当たってこれまでたどって来た道をふり返り、親しく導いていただいた恩師の学問と筆者の研究コースについて書きとめておきたいと考えている。

筆者は昭和26年に関西学院大学文学部社会学科に入学し、大道安次郎先生に社会学の手ほどきを受けた。それ以来、大学院、文学部助手、社会学部の専任講師、アメリカ・マサチューセッツ大学留学など先生が死去されるまで親しく公私にわたって御指導いただいた。大道先生は学問だけでなく人生の師であった。まず最初に大道先生との御縁について述べたい。

次に竹内愛二教授も私にとって大事な先生である。学部においても大学院においても先生の講義に列したことがないにもかかわらず、先生は未熟な筆者をコリーグとして遇していただき、公私にわたっていくつかの恩恵をいただいた。竹内先生は筆者にとって忘れ難い恩師である。第二に竹内先生について述べたい。

第三に、筆者は1965年秋から二年間、マサ

チューセッツ大学に留学した。この留学を可能にしてくれたのはマサチューセッツ大学の社会学科長、J. H. コーソン教授であった。大学院のスカラシップをいただいて1965年に留学し、T. O. ウィルキンソン教授とゴールデン教授の指導を受け都市社会学を学んだ。第三にマサチューセッツ大学の先生方について述べてみよう。

第四に、大学院留学では「都市化」の他にヨーキー先生から「人口論」ことに出生力の研究について学んだ。そして6年後にニューヨーク市立大学のピッシャーズ教授に「ニューヨークの人口過程」の研究について指導を受けた。第四にこれら二人の教授について述べてみよう。

第五に、R. デューイ教授は筆者に近隣住区について関心を与え、S. F. ファーバー教授はニュータウン論でこれを更に深めていただいた。第五に二人の教授について述べよう。

第六に、アメリカ社会学の研究家であった大道先生はアメリカ社会学界の動向を深く理解されていたので、著名なハーバート大学のT. パーソンズ教授の社会システム論に強い関心を示していた。そこで大道先生は大学院のセミナーでパーソンズの *The Social System*, 1951 をテキストに使用された。それが縁で筆者は修士論文にパーソンズの「社会システムの研究」を取上げることになり、その後もシステム論への関心を持ち続けていたので、1976年に社会学部長に就任したのを機にパーソンズ教授を客員教授として関西学院大学社会学部に招待したいと考えた。そして翌年（1977年）の秋、教授はセミナーハウスの開館記念特別講師として来訪し、いくつかの講演の外、社会学部の大学院において集中講義を行った。第六に

\*キーワード：都市社会学、人口論、エスニシティ

パーソンズ教授について書きたい。

第七に、1965年マサチューセッツ大学においてM. ゴードン教授に理論社会学を学んだが、教授はエスニシティ研究のすぐれた理論家であったから、セミナーにおいても人種問題にしばしば言及された。現在は、教授の *Assimilation in American Life*、1964 を翻訳中である。

次に1982年カナダトロントにおいて日系カナダ・コミュニティの研究に従事した。その際、トロント大学のライツ教授の理論を学習した。このように筆者がエスニシティ研究について学んだゴードン教授、ライツ教授について述べたい。

以下、七つの項目に分けて述べよう。

## (1) 大道安次郎先生と都市社会学

### (1) 入学のいきさつ

筆者は昭和26年4月関西学院大学文学部社会学科に入学した。関西の大学事情にうかつた筆者が関西学院大学に入学した契機は、当時箕面市に住んでいた姉の家に同居していた知人の長男が大道ゼミの卒業生であったところから、その方から「大道先生はとても気さくなよい先生だから是非」と勧められたからであった。長崎市立大学(夜間部)で学んだ筆者は国立大学の夜間部に進みたいと計画していたが、姉が「関西学院大学ならこの家から通学してもよい」と入学を勧めてくれた。筆者にとって昼間に勉学に専念出来るということは願っても無い話であったので、大道先生のいる関西学院大学文学部社会学科に進学したのである。

### (2) 大道先生の学問分野と業績

大道先生は敦賀市の生まれで敦賀商業学校から大正12年関西学院高等商業学校に入学され、昭和2年3月に卒業、九州大学法文学部に進学、昭和5年3月に卒業後、母校関西学院高等商業学校の講師に就任された。その後昭和19年10月には小松堅太郎教授が文学部(旧制大学)を退任されたのを受けて文学部に助教授として移られた。こうして大道先生は文学部社会学科を充実強化する任に当られた。ことに敗戦後、昭和23年以降は新制大学の社会学科の主任教授として研究室の整備に努めた。ところが昭和35年にはこの社会学科と社会事

業学科をもとに社会学部が創設され初代学部長となられた。先生は昭和47年3月に定年退職されるまで母校に42年間勤務されたのである。

学問研究についてみると、先生は多くの分野においてすぐれた業績を残されている。

その一は経済学史の研究、ことにアダム・スミスの研究者として大河内一男、高島善哉と並んでスミス研究の三羽鳥と称された。

先生の『スミス経済学の生成と発展』(日本評論社 昭和15年)は専門書としては異例の売行きを記録したと先生からよく聞いた。その他に戦後『スミス経済学の系譜』(実業之日本社 昭和22年)を出版された。さらに翻訳としては

バジョット『国民の起源』(慶応書房 昭和17年)、

ファーガソン『市民社会史』(白田書房 昭和29年)、

スミス『国富論の草稿その他』(創元社 昭和23年)

などを残されている。先生はその本質においてすぐれた「学史家」であった。

その二は「アメリカ社会学史」に関するものである。先生は昭和19年に文学部に移られたが、当時「アメリカ文化研究所」が設けられていたので、先生も「アメリカ社会学」の研究を始め、その成果を昭和22年

『アメリカ社会学の潮流』(三一書房)として公刊した。そして昭和25年秋から1年間アメリカのコロンビア大学に留学しマッキーバー教授の教えを受けた。在米中の研究をまとめたものを昭和33年

『アメリカ社会学の源流』(弘文堂)として発表している。

その三は「日本社会学史」に関するものである。大道先生は関西学院高等商業学校の学生時代に新明正道先生に社会学の教えを受け、九州大学では高田保馬先生の指導を受けた。大道先生は終生二人の恩師を深く敬愛しただけでなく、二人の社会学の巨星の学問体系を研究して一書をまとめている。昭和28年

『高田社会学』(有斐閣)を公刊した。これは筆者が三年生の頃であったが、時折研究室でお見かけする当時の先生にはあたりを払う風格が感じられた。さらに定年退職後の昭和49年には

『新明社会学』（恒星社厚生閣）を出版している。大道先生にとって新明先生は最も敬愛する恩師であっただけに、すみずみまで配慮のいきとどいた著書となっている。

二人の恩師は近代日本社会学界の巨星であったから、それ自体も日本社会学史として重要な意味をもっているが、さらに学史的研究をすすめ昭和43年には

『日本社会学の形成』（ミネルヴァ書房）を發表されている。先生はすぐれた独自の歴史研究の方法を身につけており、これを駆使して日本社会学史についても一境地を開いている。

その四は「老人・病院の社会学的研究」である。先生は鋭い感覚で時代を先取りして老人社会学の先駆者の役割を果たした。昭和25年のアメリカ留学の時期から、近い将来老人問題が重要になることを直観して研究を重ね、昭和41年に

『老人社会学の展開』（ミネルヴァ書房）を公刊した。当時筆者はアメリカ留学中であったが、わざわざこの本をアモストまで送っていただいたことを思い出す。朝日ジャーナルの書評に取上げられたとのことであるが、すみずみまで配慮のいきとどいた好著である。さらに昭和54年には

『老年の光と影』（ミネルヴァ書房）も出版された。

ところで先生は昭和38年頃から胃潰瘍で何度か入院療養され、定年退職後には手術もされた。この入院中も先生は病室に本や原稿用紙を持ち込んで研究を続けていた。そして入院患者として病院に興味を持ち昭和57年には

『病院社会学の展開』を出版されている。目にとまったものなら何でも、社会学的視点から鋭く切ろうするどん欲なまでの真摯な研究態度が先生にはあった。

その五は「都市の社会学的研究」である。最初は経済学史の研究者であった先生はアメリカ留学後、実証的研究に強い関心を持つようになり、調査に取りかかれた。まず昭和27年頃から先生を中心に研究室で「塚塚市の総合的研究」を始めた。次に日本都市学会と近畿都市学会の設立に参加され、都市学会が実施した、高知市、布施市、枚方市などの総合調査においても重要な役割を果たされた。さらに昭和35年からワイズマン団長と

の目米共同の「阪神都市圏計画調査」に参加された。また磯村英一先生に誘われ「日本地域開発センター」の理事を勤めて活躍された。

このような経験を生かして都市研究をすすめたが、地元宝塚市に焦点を当てた研究成果は昭和47年

『周辺都市の研究』（恒星社厚生閣）として公刊された。そして10年後（59年）に

『変貌する周辺都市』（恒星社厚生閣）を出版している。

先生は関西学院大学社会学部では専門科目としては「都市社会学」を担当されて来たが、昭和43年頃から病氣入院された時期に筆者が代講を勤めることとなり、翌年から筆者が都市社会学の担当となって今日に到っている。

以上のように大道先生の研究領域は多方面にわたり、各分野においてすぐれた業績を残されたが、特に都市研究に関しては筆者も先生の助手として参加させていただき、多くのことを学習し、恩恵を受けている。

### (3) 学部生時代と卒業論文

3年生のゼミナールで本格的に社会学を学ぶことに成った。テキストは新明正道先生の『社会本質論』と『社会学の基礎問題』であった。両者は新明社会学の基礎をなす「行為関連の立場」を確立した著作であるが、これとの格闘を続けることによって社会学の核心をいくらか理解することが出来たように思われる。

4年生になると卒業論文の作成が重要な課題となる。筆者はテーマとしてK. マンハイムの「知識社会学」を選んだ。当時、知識社会学の研究書はかなりの数のものがあったが、筆者にとって最も重要な文献は新明先生によるいくつかの知識社会学論であった。そして新明先生の編集された著作のなかには大道先生の論稿も含まれていた。そこで筆者は新明先生の業績をもとに新しい研究の方向を展望した。大道先生も「君の論文は新明先生のものに拠っているね」と評された。

卒業論文で今も記憶に残っていることが二つある。まず一つはマンハイムの『イデオロギーとユートピア』を神「大学の権俊夫先生の訳で読んでいてどうしても納得出来ない箇所があったので原書にも当たったが、訳の通り（nichtが入ってい

る)であったので割切れない気持ちを持ち続けた。ところが暫くして東京都立大学の鈴木二郎先生の新訳が出版されたので読んでみると、驚いたことに鈴木先生も同じ疑問を指摘しており、これは原著者の間違いであろうと注記されていることを知り、正に我が意を得た思いであった。

もう一つは、マンハイムの『イデオロギーとユートピア』を学ぶことによって一つの重要な確信——マルクス批判——を持つことが出来たことである。マルクス主義のイデオロギー論では他者の主張は存在拘束を受けたイデオロギーにすぎないと批判しながら、革命の担い手であるプロレタリアートの主張は歴史的な発展の担い手であるが故にイデオロギーであることをまぬがれていると主張するが、これに対してマンハイムはマルクス主義の主張は不徹底な独善主義にすぎず、真にイデオロギーを克服する為には、自からの立場にも存在拘束を徹底させ、そこから立場を超越した存在を媒介して「知識社会学」に到るべきだと主張している。マンハイムの知識社会学を学び、早い時期にマルクス批判に到達出来たのは卒業論文の賜であった。

#### (4) 大学院と修士論文

学部を終えた時、先生にも褒められ大学院に進学した。大道先生はアメリカ社会学の専門家であったから、アメリカの社会学界の動きをよく察知され、現今何が問題の著書であるかを知っていた。その先生が大学院のセミナーでテキストとして使用されたのはハーバード大学のT. パーソンズ教授の *The Social System*, 1951であった。当時は日本でもようやくパーソンズ理論の研究が始まった頃で、研究論文がそろそろ始めてはいたが、まだ翻訳もなかったので、テキストを読みこなすことはとても骨の折れる作業であった。

セミナー所属の全員がよるとさわると「パーソンズの理論は難しい」と嘆息を交わしていた。そこで「難しい理論こそやり甲斐のある研究対象だ」といった冗談がまこととなって修士論文にパーソンズの「社会システム論」をとりあげた。

そこで社会システム論の全容の基本を把握することがまず第一と考えて、夏休みに高野山のお寺の離れの一室にこもって、*Toward a General Theory of Action* の短い一節「社会システム」を

全訳してこれを熟読玩味した。これがいくらか効果があったのか少し自信が出て来た。筆者の修士論文は思いがけず審査委員から好意的な評価をいただいた。大道先生は「君の論文を審査委員の竹内先生、ヒルバン先生が高く評価している」といって間接的に褒めてくれた。難しい対象に挑戦したということで敢闘賞を下さったのかと思っている。

#### (5) 助手時代と「かくれ切支丹」研究

修士論文を提出し修士課程を終えた後、文部省の奨学金も関西学院大学の助手補の手当もなくなるため筆者はきびしい選択の岐路に立たされた。一つは他の大学の博士過程(当時文学部の社会学科には博士課程がなかった)に進むか、他は中学か高校の教員の職を探すかであった。そこで大道先生に相談しところ、先生は「暫く考えさせてくれ」と言われた。二週間位経って再び「どうでせうか」と先生の返事を催促したところ、先生は「もう一年このまま研究室に残れ」と言われたので筆者はいささか困惑した。というのは筆者は生活費の保障を必要としたからである。そのことを申し上げると、先生は「大学の助手補を君にもう一度もらえるように努力する、残りは家庭教師でのげ」とのことであった。不確定要素にもとづいた話であったので、不安が残ったが恩師がここまで言うのであれば、これに賭けるしかないと観念して研究室に残った。ところが秋ごろになると先輩の助手が事情で翌年3月には退職し民間企業に転出することが決まり、昭和33年4月から筆者が文学部社会学科の助手に任命されたので生活も安定し研究に専念出来るようになった。

助手時代は「パーソンズ理論」の研究と「かくれ切支丹」の研究を行った。

この時期パーソンズ研究について次の論文を公刊している。

「社会システム研究」

『関西学院 社会学』第3輯 昭和32年  
「構造機能分析の展開(その1)」

関西学院大学 文学部『人文論』昭和34年  
「T. パーソンズに於ける「経済」と「社会」」

『社会学評論』35号 昭和34年  
「構造機能分析の展開

—T. パーソンズ研究(その1)—」

『社会学部紀要』創刊号 昭和35年  
関西学院大学

「T. パーソンの動態論について」

『社会学部紀要』第3号 昭和36年  
関西学院大学

「社会的行為の枠組と構造機能的アプローチ」

『論攷』第8号 昭和36年  
関西学院大学

「組織理論の基礎問題—T. パーソンズ研究—」

『論攷』第9号 昭和37年  
関西学院大学

「T. パーソンズ理論の展開」

『社会学部紀要』第6号 昭和38年  
関西学院大学

「主意主義的行為の構造

—T. パーソンズ研究—」

『論攷』第10号 昭和38年  
関西学院大学

筆者は熊本県天草郡天草町高浜の出身であるので、隣村の大江村の「かくれ切支丹」を郷土史研究のつもりで始めたが、次第に興味が深まり研究を続けた。村の庄屋の古文書を使って九州大学の古野清人教授がまとめた「文化二年のかくれ切支丹取調べ記録」をもとに現地調査を行って

「かくれ切支丹の組織と村落構造」(昭和32年)

関西学院大学『関西学院 社会学』4 輯

「かくれ切支丹の復活と村落構造」(昭和34年)

関西学院大学『関西学院 社会学』5 輯

「信仰組織と部落構造」(昭和39年)

関西学院大学『社会学部紀要』8号  
の三篇を公やけにした。

#### (6) 社会学部開設と専任講師就任

助手2年目に入るとにわかに社会学部新設の動きが起きた。そもそもの起りは理学部新設であったが、経営上文科系の学部と抱き合せて作ることが望ましいという事になり、急に社会学部を先行させ昭和35年、ついで理学部を36年に新設した。発議されてからわずか1年間で実現している。学部の構成は文学部社会学科と社会事業学科を基盤として、これに産業社会学と広報の二つを加えて構成された。社会学科一学科とし、理論社会学コース、社会福祉コース、産業コース、広報コースの四コースからなっている。

発議されてからわずか1年間で創設されたが反対者もなく、学生会は新学部推進を決議するほどで、まことにスムーズに進んだ。

新しい社会学部が出来たため助手であった筆者も専任講師に選任された。まことに幸運としか言いようがない。

#### (7) コーソン教授とアメリカ留学

筆者が助手の頃、大道先生はアメリカ・マサチューセッツ大学のJ. H. コーソン博士を招聘して大学院で集中講義を行なった。そしてコーソン教授は講義の他に日本の大学生の意識調査を実施した。日本全国の10の大学で1校200票ほどの調査であったから、その準備、配布、回収などには大きな精力をつかった。この調査の実施の助手を筆者が勤めたわけである。その際の援助を評価して、コーソン教授は筆者に対してマサチューセッツ大学のスカラシップを出すと約束して帰国された。それから英語(会話)を本格的に勉強して5-6年後の昭和40年に当時はまだ困難であったアメリカの大学への留学の夢を果たしたわけである。

ただしスカラシップはもらったものの、当時は渡米の交通費が高くてどうにもならないため、フルブライトに出願した。一次試験のあと面接試験はアメリカ人と日本人が二人で実施された。ところがその時まことに幸運な奇蹟が起った。まずアメリカ人のインタビュアーが「アメリカのどこの大学に行って何を研究するのか」と質問したので筆者はコーソン教授から教えられた通り、「マサチューセッツ大学のウィルキンソン先生のもとで都市社会学を研究します」と答えたところ、そのアメリカ人は「笑い声で私がウィルキンソンだ」と言われたのには驚いた。さらに偶然が重なった。次の日本人のインタビュアーは慶応大学の矢崎武夫先生であった。矢崎先生は10年ほど前(昭和28年頃)シカゴ大学から帰国された際、大道先生に招聘されて関西学院大学文学部の社会学科で人間生態学について集中講義された方であった。当時筆者は理論社会学に関心が向いていたので、人間生態学にはあまり興味がわかず、矢崎先生の集中講義には参加しなかったが、大道先生を通して矢崎先生を知っており、矢崎先生の方も大道先生の助手ということで私のことを知って



いた。

このようなわけで難関といわれるフルブライトの試験にパスしたわけである。まことにラッキーとしか言いようがない。

このように恩師大道先生は温容でただ黙々と研究に打込まれ多方面に才能を発揮された。このような優れた先生に導かれて研究者の道を進むことが出来たのはなによりの幸いであった。

筆者が恩師大道先生について書いたものとしては次のものがある。

- ①「大道安次郎先生の人と業績」  
関西学院大学『社会学部紀要』55号 昭和62年
- ②「関西学院における社会学の歩み」(その2)  
同上 58号 平成1年
- ③「インタビュー 大道安次郎 私の歩いた道」  
関西学院『クレセント』18号
- ④『大道安次郎先生を偲ぶ』(玄文社) 昭和63年  
(筆者が企画・編集した)
- ⑤『関西学院大学 社会学部30年史』 平成7年  
(第1章、第2章)

## [2] 竹内愛二先生と地域福祉

### (1) 竹内愛二先生とコミュニティ・デベロプメント

竹内愛二先生は文学部社会事業学科の主任教授であった。筆者は先生の講筵に列したこともないし、本格的に先生の理論を学習したこともなかったから、いわゆる恩師とは言えないのかも知れないが、しかし筆者にとって竹内愛二先生はやはり恩師といわなければならない大事な敬愛すべき先生である。

竹内先生は父親が牧師というクリスチャンの家庭に育ち同志社中学校を卒業後、神戸三菱造船に入社したが、10年後に志を立てて米国に留学し名門オベリン大学でBA およびMA を取得した。帰国後は神戸女学院を経て同志社大学文学部の講師となり、後教授に進んだが、昭和21年に退職され一時灘生活共同組合文化部長に就任された。ところが昭和23年4月には関西学院大学文学部の嘱託講師となり、翌24年には専任講師となる。さらに昭和27年には竹内先生を中心に社会事業学科が

新設され学科の主任教授に就任された。竹内先生の尽力によって学科は次第に充実して来たが昭和35年には社会学科と共に社会学部に発展した。こうして竹内先生も昭和35年に社会学部教授となり41年3月定年(70才)で退職された。

先生はアメリカで習得したケースワーク技術論を日本に紹介された先達であったが、それは同志社においてよりも関西学院大学の社会事業学科で見事に開花したといえよう。

主な著書は

- ①『ケースワークの理論と実際』 叢松堂  
昭和13年
- ②『ケースワークの技術』 中央社会福祉協議会  
昭和25年
- ③『グループワークの技術』 中央社会福祉協議会  
昭和25年
- ④『コミュニティ・オーガニゼーションの技術』  
中央社会福祉協議会 昭和28年
- ⑤『科学的社會事業入門』 黎明書房 昭和30年
- ⑥『専門社会事業研究』 弘文堂 昭和34年
- ⑦『実践福祉社会学』 弘文堂 昭和40年
- ⑧『コミュニティ・デベロプメント』(共著)  
ミネルヴァ書房 昭和45年
- ⑨『社会福祉の哲学』 相川書房 昭和54年

これをみると先生は社会事業の三次元の技術論を完成するとともに、理論的研究として専門社会事業を体系づけ、晩年は地元でコミュニティ・デベロプメントを実践され、福祉の哲学を残されている。キリスト教にもとづいた社会事業の実践家としてまことに見事な生きざまを残されているといわざるを得ない。

### (2) 竹内愛二先生と修士論文

竹内先生と親しくさせていただくようになったのは、多分、筆者の修士論文を竹内先生に審査していただいたからであったと思う。竹内先生自身が、当時、パーソンズ理論に関心を抱き研究を始めておられた為か、筆者の修士論文『社会システム研究』を評価していただいただけでなく、その後、同学の士として遇していただき、T. パーソンズの社会システム論についての意見や批評を求められた。社会事業学科の主任教授から一大学院生に過分の対応をいただいたことにいささかとまどいながら、若干のコメントや意見を述べさせてい

ただいたことは真に身にあまる幸せであった。このことは竹内先生が学問研究について如何に真摯であったかの証しではないかと思う。

### (3) 講師職の紹介

いま考えてみると筆者にとって講師職（非常勤）を最初に紹介していただいたのも竹内先生であった。当時筆者は文学部社会学科の助手であったが、どうゆうわけか竹内先生から大阪市の聖バルナバ病院附属看護学院で社会学を担当することを奨めていただいた。これは筆者が社会学を教えた最初の経験であり、かなり長い期間にわたって楽しく教えることが出来た。

### (4) 竹内愛二先生と社会学博士

竹内先生は昭和35年に「専門社会事業研究」によって関西学院大学文学部から文学博士の学位を授与されている。そして昭和41年3月70才で定年退職されたがその後も真理の探究の情熱は益々燃えあがり、次々と新しい課題に挑戦し、その成果を公刊された。しかも80才を越えた昭和54年には社会学の学位請求論文として『実践福祉社会学』を提出された。当時学部長を勤めていた筆者は論文審査が速やかに進むことを願った。というのは先生は既に84歳の御高齢で病床にあったからである。事態は切迫していると思われたので、筆者は委員会に審査の促進を要請した。そして劇的な展開の中で先生は「社会学博士」をみやげに天国へ帰られたのである。筆者は当時の事を同窓会の「母校通信」（1980年春）に次のように書いている。

「次は悲しいお知らせですが、文学部の社会事業学科を創設され、社会学部教授を昭和41年3月に定年退職された竹内愛二先生が2月18日、84才で永眠されました。先生はなくなられる直前まで活発な研究活動を続けられ、昨秋社会学部に学位請求論文を提出されていましたが、二日前の2月16日「社会学博士」が授与されました。「学位記」を持参しましたところ、病床にあった先生がゆっくりと読み終えて、低い、しっかりと力強い声で「これでいい、もう思い残すことはない。ありがとう」と手をさしのべ、私の手をしっかりと握りしめられました。先生の温かい手の感触を忘れることはできません。いまはまだ先生の御冥福をいのるばかりです。」

筆者が先生宅を辞した後、ほどなく先生は意識を失ない、二日後の18日に昇天されたわけです。「学問の鬼」であった竹内先生を畏敬の念をもって今しみじみと追慕している。

### (5) コミュニティ・デベロップメントの実践

日本にケースワークをいち早く導入した竹内先生は社会福祉の理論家であるだけでなく、実践家であった。晩年には地元で創設された教会をコミュニティ・センターとして活発なコミュニティ・デベロップメントを実践された。

「文教的地域社会の自己開発」日本生命済生会『地域社会開発の条理』昭和39年

「コミュニティ・デベロップメントにおけるニードの発見と分析」関西学院大学社会福祉研究室

『コミュニティ・デベロップメント——住民主体による地域社会づくり』（共著）ミネルヴァ書房 昭和45年

がそれである。神戸女学院や聖和大学が位置する岡田山から関西学院大学のある上ヶ原を含む地区を「文教地区」に指定する運動を起こして行政に働きかけてこれを実現されたのである。さらにこの地区で福祉会の結成や活動の促進などコミュニティ・デベロップメントを実践された。

ところで筆者は昭和43年頃から神戸市のコミュニティの形成に関与して来た。近年は神戸市市民福祉調査委員会で今井鎮雄先生のお手伝いをしており、今年「ふれあいのまちづくり協議会」において福祉行動目標の設定のアクション・リサーチに従事した。このように筆者はコミュニティ論の視点から地域福祉の研究に深くコミットしているのである。いまよく気がついてみると筆者も竹内先生が実践された道をとぼとぼと追っているように思える。

終わりに私事にわたるが、竹内先生は筆者の結婚にも格別の温かい配慮をしていただいた。先生の御夫人の従妹を自分の伴侶とすることが出来た御恩を深く感謝している。

このように竹内先生は公私にわたって筆者にとってきわめて重要な恩恵を与えていただいた方であり、大道先生とならんで竹内先生は筆者が最も敬愛してやまない恩師である。

### [3] マサチューセッツ大学と都市社会学

#### (1) J. H. コーソン (Korson) 先生

前にふれたように筆者は1965年フルブライト・グランティとしてその年の8月ペンシルベニア州のバックネル大学でオリエンテーションを受けたあと、9月初めにマサチューセッツ州のアーモストにあるマサチューセッツ大学に到いた。

ここではJ. H. コーソン教授が学部長として何くれとなく面倒を見てくれた。教授はエール大学を卒業して、1945年に開設された社会学科の長となり20年余りもその地位にあったが、筆者が滞在中に学科長を退任して数年間教えた後、定年退職された後もアーモストに住み活発な研究活動を続けていたが、学科開設50周年の昨年(1995年)7月に永眠された。筆者は2ヶ月後の9月末にアーモストを訪ねキャンパスのホテルに2泊したが、まず最初にウィルキンソン先生に導かれコーソン先生が眠るお墓に参った。そこはウィルキンソン先生の家からも近い明るい公園墓地であった。

コーソン先生は前に述べた滞日中に実施した日本の大学生の意識調査の分析結果を発表したいと論文を送って来たので、筆者と共同で関西学院大学の欧文紀要に発表した。

Decision Making among Japanese University Students, 昭和43年、関西学院大学『欧文紀要』17号 がそれである。

念願のアメリカ留学を可能にしてくれたコーソン先生は筆者にとって忘れ難い恩人である。当時の大学院生のスカラシップは年間2000ドルであったから、1ヶ月200ドルに満たない少額で生活していた。ところが二年目の夏には2ヶ月間調査助手をしたことにして500ドルを支給していただいた。実際にはこれといった仕事もしていないのに与えられた500ドルは当時の筆者にとって干天の慈雨であった。コーソン先生の暖かい配慮にいまも深く感謝している。

#### (2) T. O. ウィルキンソン (Wilkinson) 先生

マサチューセッツ大学では数多くの先生の講筵に列し、教えを受けた。理論社会学のMilton Gordon, Wendell King, William Wilson 先生、人口論のDavid Youkey, 都市化研究のT.O.Wil-

kinson, Hilda Golden 先生などである。

その中でも最も強い影響力を受けたのはウィルキンソン、ゴールドデン、ヨーキー、ゴードン先生達であった。

ウィルキンソン先生は米国海軍日本語学校で日本語の教育を受け、戦後、四国各地の文化センターで文化行政にかかわっているうちに大の日本文化好きに成った人である。その後コロンビア大学でK. デービス教授のもとで「日本の都市化の研究」で学位を取得した後、コーソン教授に招かれてマサチューセッツ大学の教授に就任し、日本の都市化過程を研究した。筆者の滞在中に博士論文をもとにした。

*Urbanization of Japanese Labour Force* 1868-1955, University of Massachusetts, 1966 を刊行された。

筆者はウィルキンソン先生の調査助手を指示されていたので、授業に出席する他は教授の研究室において調査の作業を行なった。そのテーマは「日本都市の機能分類」であった。先生のカードを使用した分類方式は筆者にとって新鮮ですぐれた方法と思えたのでその後長くこの方式を愛用した。この作業で蓄積したデータは帰国後に整理し共同で発表した。

「日本都市の機能分類1960年(その1)」

関西学院大学『社会学部紀要』15号 昭和43年「日本都市の機能分類 1905年(その2)」

関西学院大学『社会学部紀要』18号 昭和44年留学は1年間のつもりであったが居ごちが良かったので延長して2年間滞在した。それを可能にしてくれたのはウィルキンソン先生の尽力であった。筆者が滞在した二年目にはコーソン先生は学科長を退任されてウィルキンソン先生が代行になり、後任にE. Lee 博士が就任されたが都合で数ヶ月で転出されたので、結局、ウィルキンソン先生が学科長となった。さらに数年間学科長を勤めたあと、大学のデーンとなり8年間もこれを勤めた。このように先生は大学の管理的な仕事にも能力を発揮して活躍された。数年前に定年退職されアーモストで余生を送られている。少し健康を害されていると書いて来たので心配していたが、昨年9月にお訪ねした時も、アーモスト近郊をあちこち案内して下さった。ウィルキンソン先

生は筆者が最も敬愛するアメリカの先生である。マサチューセッツ州・アーモストとともに忘れ得ぬ恩師である。

### (3) H. ゴールデン (Golden) 先生

マサチューセッツ大学は人口研究と都市研究にすぐれた人材が集まっていた。T. O. ウィルキンソン、ヨーキー、ゴールデン先生などがそうである。しかもすべてK. デービスの教えを受けていた。

デービスはハーバート出身の理論家で特に都市化の研究に精力を注いだ研究者でありアメリカ社会学学会会長も勤めた。主著は *Human Soicety*, 1948 である。しかし彼は人口研究においても一派を形成して教祖的な存在であった。デービス教授がカルフォルニア大学に移ったあと International Urban Research においてウィルキンソン先生もゴールデン先生もデービス教授が主導する世界の都市化について研究している。それは International Urban Research, *The World Metropolitan Area*, Berkeley: University of California, 1959. に残されている。

ゴールデン先生はマサチューセッツ大学に就任する前にはデービス教授の助手をしていたようで、デービス教授との都市化に関する共同執筆の論文が多い。例えば次のものがある。

“Urbanization and the Development of Pre-industrial Areas,” *Economic Development and Cultural Change*, 3, October, 1954.

このようなわけで先生の講義のなかでも都市化論は豊富な資料を駆使して展開され実に魅力的なものであった。ゴールデン先生は「都市社会学」を担当されていたが、テキストにはギストとファーバー (Noel P. Gist, Sylvia Fleis Fava) の *Urban Society* の互版を使い熱の入った講義をされた。筆者も毎回講義予定の論文をすべて読み熱心に聞いた。この学習によって多くの知識を身につけることが出来ただけでなく筆者の「都市社会学」の基礎を形成することになった。

ゴールデン先生がもう一つ力を入れて講義され、筆者が強い影響を受けた問題はギディオ・ジョバーク (Gidion Joberg) の理論、ことにシカゴ学派批判であった。ジョバークは前近代社会の都市を研究することによって、シカゴ学派が提示

した都市的生活様式論はアメリカ・シカゴの都市の特徴ではあっても、普遍性をもつものではなく、時間性、空間性に規定された特殊性にすぎないと指摘している。

筆者はジョバークを通してシカゴ学派に強い関心を持つようになり、帰国後にパーク等の

*The City*, 1925 を大道先生と共同して翻訳した。

大道安次郎・倉田和四生訳『都市』鹿島出版会  
昭和47年

がそれである。

このようにゴールデン先生の「都市社会学」の講義は筆者に強い影響を与えている。

マサチューセッツ大学で人口論と都市社会学を学習したことが役立って、帰国後に「人口論」の担当者となり、後に「都市社会学」も担当することになったのである。

コーソン先生、ウィルキンソン先生、ゴールデン先生の大きな学恩を終生忘れてはなるまいと肝に銘じている。

### [4] ヨーキー教授とビッシュヤーズ教授 (人口論)

#### (1) D. ヨーキー (Youkey) 教授と人口論

(出生力)

マサチューセッツ大学ではウィルキンソン先生とゴールデン先生に都市社会学ことに都市化の研究を学んだ他にヨーキー先生に人口論を学んだがこれが筆者にとって重要な影響を与えている。ヨーキー教授はプリンストン大学で人口論を修めた方であったが、人口論の中でもことに「出生力」の研究に焦点を当てておられた。

先生のセミナーは最初学生は三人であったが一人はすぐに脱落し二人になった。ところが相棒は60才位いの社会人の御婦人であり、時々欠席するので、先生と筆者が一對一になることがしばしばあった。本格的な人口論の学習は初めての経験であり、特に出生力という研究視角に魅力を感じた。無我夢中で指定された論文を読んでいるうちに、いつの間にか人口論ことに出生力の研究に興味を覚えるようになって来たのである。

そのことを関西学院大学社会学部の先輩に書き送ったところ、帰国後、筆者に人口論を担当する

よう指示された。こうして初めての専門科目の担当が人口論ということになった。しかもヨーキー先生の影響でこの他、出生力に力を入れた人口論を以来30年にわたって担当している。1970年に筆者は

『都市化の社会学』法律文化社

を出版したが、それに特徴があるとすればその一つは「都市化」と他は「出生力」に力を入れていることであろう。これはウィルキンソン、ゴールドン、ヨーキー先生達の影響である。

## (2) J. M. ビッシャーズ (Beshers) 教授と人口研究

### 1) ビッシャーズ教授の著書との出会い

アーモストにおいて人口論の研究に興味を覚えたが、その中に社会や価値の問題があまり取扱われていないのがいささか不満でもあった。1967年米国からヨーロッパ経由で帰国の途中、ロンドンに立寄ったついでにロンドン・スクール・オブ・エコノミックスのキャンパスを訪ね、そこの本屋でビッシャーズの著書

*Population Processes in Social System*, The Free Press, 1971.

を見つけて眺めているうちにこれに魅了され、購入して帰国した。

帰国後、人口論の担当者となったこともあって、これを読んでいくうちに翻訳しようと思いつき、昭和46年に念願かなって

『人口と社会システム』鹿島出版会

として出版した。以来今日までこれを教科書として使っている。

本書の特色として、①人口過程を近代化の一側面として捉え、社会の他の側面と関連させていること、②マルサスの自然的-生物学的変数による説明、マルクスの経済関係-階級による説明にとどまることなく、ウェーバーの価値システムを取り入れていること、③政治システムを考慮していること、④西欧と非西欧の近代化の比較研究に指向していること、⑤ミクロな社会心理学的分析の成果を発展させている。⑥意志決定論、コミュニケーション理論をもとり入れている。これはすぐれた社会変動論ともなっている。

この翻訳を縁にビッシャーズ教授のいるニューヨーク市立大学で研究することを思い立ち

「ニューヨーク大都市圏の発展」というテーマで ACLS (American Council of Learned Societies) に出願したところ、幸いにも採用となり昭和48年秋から一年間、ニューヨーク市立大学の大学院センターの研究員となった。

クインズ区のフラッシングに住み、週一度はクインズ・カレッジでビッシャーズ教授の「都市社会学」を聴講し、週一回大学院センターにおいてファーバー先生の「ニュータウン論」を聴講、残りはニューヨーク市役所の市計画局の資料室に通って資料を収集するという生活を続けた。

ビッシャーズ教授はノースカロライナ大学で博士号を受け、MITの準教授を経てニューヨーク市立大学の一つであるクインズ・カレッジの教授となり、大学院センターの教授も兼ねていた。業績としては

*Urban Social Structure*, The Free Press, 1962.

*Computer Methods in the Analysis of Large-Scale Social System*, MIT Press, 1965.

*Population Processes in Social System*, The Free Press, 1967.

がある。筆者がニューヨークで研究に従事した1973年にはビッシャーズ教授はクインズ・カレッジで「都市論」と「人口論」を担当していた。そこで筆者はこれらを聴講しビッシャーズの理論を学習した。

他方ビッシャーズ教授は大学院センターでも講義を持つとともに、そこの研究室でニューヨーク市計画局のコミュニティ・プランニング・デスクトの人口資料の分析を行っていた。筆者の研究テーマは「ニューヨーク大都市圏の発展」であったから、ニューヨーク大都市圏の人口資料を収集することが最重要な課題であった。これの出発点となったのは

Adams, Thomas, *Populations, Land Value and Government*, Regional Plan of New York and Its Environment, 1929.

であるが、その後のデータを主に国勢調査から収集した。その際ビッシャーズ教授がニューヨーク市の計画局と共同で人口分析を行っていたため、それからの資料をすべて自由に利用させてもらった。このことが筆者の研究を可能にしたのである。帰国後発表した筆者の論文には次のものが

ある。

Comparison of Social and Economic Characteristics between New York City and Two Japanese Cities 昭和50 欧文紀要 第24号 関西学院大学

Comparison of Population Characteristics between New York City and Two Japanese Cities 昭和51 欧文紀要 第25号 関西学院大学

Suburbanization of New York Metropolis 昭和52 欧文紀要 第26号 関西学院大学

Migration in New York City 昭和53 欧文紀要 第27号 関西学院大学

Racial Segregation in New York City 昭和54 欧文紀要 第28号 関西学院大学

Racial Segregation in New York City—part 2— 昭和55 欧文紀要 第29号 関西学院大学

Population Characteristics and Process of New York City 昭和56 欧文紀要 第30号 関西学院大学

Racial Segregation in New York City—part 3— 昭和57 欧文紀要 第31号 関西学院大学

さらにこの研究を進めるなかで筆者が痛切に感じたことは、ニューヨーク大都市圏の研究は人種・エスニックと離れてはあり得ないという事実であった。そこからエスニック別の生活機会の違いについての関心を深めていった。これが近著の『北米都市におけるエスニック・マイノリティ』ミネルヴァ書房 1997年となったのである。

筆者を人口研究に誘ない、関心を高めていただいたヨーキー教授、ピッシャーズ教授の益々の御発展を祈りたい。

## [5] デューイ教授とファバー教授（近隣住区論）

(1) R. デューイ (Dewey) 教授と近隣住区  
昭和38年頃、九州大学の鈴木廣先生からリチャード・デューイ教授の“Neighborhood,

Human Ecology, and City Planners,” 1950という論文を翻訳するようにとの依頼があった。近くアメリカ留学することが既に決まっていたので喜んで引き受け、いささかあわただしさの中に訳を終えて渡米した。この翻訳は

鈴木廣編訳『都市化の社会学』誠信書房 昭和40年の14章に「近隣・都市生態学・都市計画家」として公刊された。ほどなく渡米した筆者はマサチューセッツ大学の学習生活にもいくらか慣れたころニューハンプシャー大学のデューイ先生に連絡をとり、ニューハンプシャーのお宅を二度訪問した。先生は自分の論文がウェーバー、ジンメル、パーク、パーゼス、ワースなど傑出した学者達と並んで日本で翻訳されたことを大変喜ばれ、筆者に対してことのほか親切にいただいた。

まず先生のお宅の敷地の広さに驚かされた。屋敷の中を大きな川がとうとうと流れており、町の中にありながら自然の中に生活しているように感じられた。また先生はクラシック・カーに乗る趣味があるらしく、まぶしいほどに輝いた大きなクラシックカーが二台あり、年に一度の大会にはこのカーで大陸を横断するのだと話しておられた。アメリカの大学教授はこれ程までに優雅なものかと感心したものである。冗談のつもりで「ジョン・デューイさんと関係ありませんか」と聞いたところ、「はい遠い親類です」と答えられたのである程と得心した次第であった。

アメリカ留学は一年の予定であったが程なく、もう一年延長したいと考えるようになり、デューイ先生にお手紙で二年目のスカラシップをもらえないかと依頼したところ、すぐ「承知した」との温かい返事をいただいた。そのことをウイルキンソン先生に話したところ、「他の大学へ行かなくともこの大学で二年目のスカラシップを出す」と約束したので結局デューイ先生のお世話にはならなかったが、あの時のデューイ先生の温情はいつまでも忘れていない。

筆者のコミュニティ研究の中でペリーの近隣住区論は最も重要な柱であるが、それはデューイ先生の論文を翻訳したことに始まっている。

デューイ先生の論文は翻訳したもの以外にアーバニズム論について、

R. Dewey, “The Rural-Urban Continuum,”

*American Journal of Sociology*, 1960年  
を拙著『都市コミュニティ論』の中で論究している。

## (2) ファーバー教授とニュータウン論

ファーバー教授はブルックリン大学の教授で  
ニューヨーク市立大学大学院センターでは  
「ニュータウン論」を講義されていた。先に述べた  
ようにマサチューセッツ大学のゴールデン教授が  
使用していたアメリカで著名な都市社会学の教科  
書 *Urban Society* の著書がファーバー教授であ  
る。この書物は教科書としてアメリカで最もよく  
使われており1965年当時すでに5版を重ねてい  
た。このようにファーバー教授は著名な都市社会  
学者である。

また、先生の業績としては、*Urban Society* の  
外に次のような論文や編著がよく知られている。

- ①“Suburbanism as a Way of Life”, *American Sociological Review* 21, February 1956.
- ②“Beyond Suburbia,” *The Annals of the American Academy*, Nov. 1975.
- ③*Urbanism in World Perspective*, New York: T. Y. Crowell, 1968.

1973年ニューヨーク市立大学大学院センターで  
ファーバー教授の講義を聴講出来たのは何よりの  
幸運であった。デュイ教授のところでふれたよう  
に、「近隣住区」に関心を持ち、ニューヨークに  
留学する前から神戸市職員と共同でペリーの『近  
隣住区』の翻訳を始めていたが、ファーバー先生  
がニュータウン論の中でペリーの近隣住区論につ  
いて詳細に説明し案内していただいたからであ  
る。先生の指導によって「サニーサイド・ガーデ  
ンズ」や「フォーレストヒルズ・ガーデンズ」、  
「ラドバーン」などペリーの近隣住区論の舞台裏  
をくまなく探訪することが出来たことは望外の幸  
せであった。このようにして予想外の収穫を得て  
帰国した著者は翌年

『近隣住区論』鹿島出版会 昭和50年  
を翻訳出版することが出来た。

ファーバー先生の話によるとニューヨーク市立  
大学ではニューヨーク市の高校卒業生は授業料は  
無料であり、ニューヨーク市立大学の教員の給与  
水準は全米でも最も高いところにあるとのこと  
であった。ところが筆者が帰国後、1年位経った

頃、日本の新聞にニューヨーク市が破産したとの  
記事が出たので驚いた。それは赤字のニューヨ  
ーク市に対する連邦の補助が打ち切りになったとい  
う事であった。その後、教授からいただいた手紙に  
よると、教員もリストラが始まったが、先生はシ  
ニアであるから差当って心配はないと書き添えら  
れてあった。これによってニューヨーク市の財政  
危機の深刻さを知った次第である。

デュイ教授およびファーバー教授との出会  
いは近隣住区理論への導きの星をいただくこと  
になった。デュイ教授とファーバー教授の深い学  
恩に感謝の意を表したい。

ビッシュアーズ教授もファーバー教授もニュー  
ヨーク市立大学の中でもとくに卓越した教授であ  
る。このような先生に温かい指導を得たことを幸  
運と思い深く感謝している。

## [6] パーソンズ教授と社会システム論

### (1) T. パーソンズ (Parsons) 教授招聘の企画

筆者は昭和51年4月、萬成博学部長のあとを受  
けて学部長に選任された。就任に当って在任中に  
二つの課題に取り組みたいと考えた。その一つは  
大学院の社会福祉専攻に博士課程を創設する試  
みであり、もう一つは学部の学術研究振興のため  
のイベントとして、かねて尊敬するハーバート大  
学のタルコット・パーソンズ教授を関西学院大学  
社会学部に招聘することであった。幸いこれは二  
年間で双方とも実現したのである。

パーソンズ教授を招聘するため二つのことを企  
図した。一つは丁度その頃関西学院大学で制度化  
されたばかりの「客員教授」の制度を利用して  
パーソンズ教授を関西学院大学に招聘する試  
みであり、二つ目はパーソンズの論文を筆者が翻  
訳する計画の許可をもらいたいというものである。

そこでこれまで理論の研究だけで個人的には未  
知であったが、勇気を出して二つの意図を手紙で  
お願いした。ところがしばらくして返事があり、  
「翻訳は承知した、日本行きについては他にもア  
メリカ国内の大学から招待を受けているところ  
もあるので、その調整をする必要があるが前向き  
に検討したい」とのことであった。

早速、翻訳をすすめる一方で客員教授第一号としてパーソンズ教授を申請した。いずれも順調に運んだ。翻訳は、

Talcott Parsons (1) An Outline of the Social System, (2) Introduction (to Part two) in Talcott Parsons et al. ed., *Theories of Society*, Free Press, 1961. を

T. パーソンズ 倉田和四生訳『社会システム概論』晃洋書房 1978年

として教授が来訪される3ヶ月前に出版した。

客員教授の方も許可に成ったが、丁度その頃に千刈セミナーハウスの開館式のため海外から世界的に著名な学者を招待するという話もちり上り、ハーバート大学の高名なパーソンズ教授を当ててはという事になった。その方が客員教授よりも待遇がよいということで結局「関西学院千刈セミナーハウス開館記念セミナー招待講師」という名目で呼ぶことになった。

## (2) 講演とセミナー

こうしてパーソンズ教授は昭和53年10月20日午後大阪国際空港に降り立った。そして10月23日からクリスマス直前まで足掛け三ヶ月各種の講演と大学院での集中講義がなされたのである。大学院の集中講義は社会学部一階会議室で行なわれたが他大学、他学部の聴講者もあって、毎回20名ぐらいが出席した。春日雅司、村田充八君など数名の大学院生が四単位を取得している。

三ヶ月間の学院のゲストハウスに滞在中に集中講義の他に、数多くの講演やセミナーが行なわれた。社会学部主催の講演会では「現代社会学の展開」大学主催講演会では「現代社会における大学の諸問題」

さらに千刈セミナーハウスにおける開館最初の記念セミナーが11月17日、18日の両日にわたって開催された。第一日は午後2時からパーソンズ教授が「現代社会の危機」について講演し、夕食のあと午後7時から二時間にわたって同じテーマでパネルディスカッションを行なった。パネラーはパーソンズ、富永健一、新睦人、武藤一雄、中野秀一郎の名氏で司会は筆者が担当した。2日目は「現代社会と宗教」という題でパーソンズ教授が講演された後、活発な質疑応答がなされた。このセミナーには北海道から九州まで全国各地の研究

者が参加し、定員70名を予定したところ100名を超える盛況となった。

また学外からも各所から招待を受けた。組織学会関西支部では11月25日に学会主催の会を開きそこで「組織理論へのアプローチ」と題した講演を行なった。日本社会学会も東京で講演会を開いた。さらに筑波大学と余暇開発センター共催の筑波会議にも招待されたので私も同行参加したが、パーソンズ教授のための特別の歓迎会が開かれるなど大歓迎を受けた。

関西学院大学ではパーソンズ教授の学問上および関西学院大学への貢献を高く評価して12月14日、パーソンズ教授に対して関西学院大学名誉教授を贈呈した。教授はすでに世界から8つの名誉学位をもらっていたが、関西学院からの学位を受けることはまた格別の喜びだ、と言われた。

社会学部では学内の講演を集めて『社会学部紀要38号』にパーソンズ特集として掲載した。また大学院の講義もほとんど録音していたのでこれをおこしてタイプし、若干間違いを正して筆者がカナダ・トロント大学滞在中（昭和57・58年）に翻訳した。

T. パーソンズ・倉田和四生訳『社会システムの構造と変化』創文社 昭和59年

## (3) 教授のお人柄

パーソンズ教授は3ヶ月の日本滞在を楽しまれてクリスマス直前に帰国された。

教授が滞在中、筆者は家も近いのでホスト役も果し、いろいろ面倒をみることになった。さきにふれた通り、筑波大学へも同行案内した。この三ヶ月間にパーソンズ先生と親しく接触したなかで先生の人格にふれることが出来た。その中で特に感銘を受けたことがあった。学院が先生を招待する際に示した条件はセミナーハウスの開館記念講師としての謝礼と往復旅費であった。ところが社会学部では大学院で正式に講義していただいたので、その講義料を合せて支払った。ところが帰国されてから教授から連絡があり、最初に聞いていた条件より多く送金があったので返金することである。これを納得させるのに大いに骨を折ったことを思い出す。

パーソンズ教授には学問の探究のみが目的で世俗のことには恬淡として清潔であることにいたく



感じ入ったことであった。

#### (4) ドイツ・ミュンヘンにおける急逝

パーソンズ教授は帰国前にも「来年(1979年)5月には学位取得50周年記念にハイデルベルク大学に招待されているのでドイツを訪ねるのを楽しみにしている。これは私のセンチメンタル・ジャーニーだ」と語っておられた。そして1978年5月にはハイデルベルク大学を訪問された後、5月18日ミュンヘンにおいて講演された夜半に心臓病で急死された。「不世出の碩学」は彼がどの国よりも親愛の情を持ちつづけたドイツにおいて帰らぬ人となったのである。

筆者は1984年パーソンズ先生の翻訳『社会システムの構造と変化』(創文社)のあとがきに次のように書いている。

1979年5月8日は私にとって正に「青天の霹靂」でした。敬愛してやまぬ米国の社会学者タルコット・パーソンズ教授がドイツのミュンヘンにおいて急逝された、というニュースを日本の新聞が写真入りで報じたからです。

「不世出の碩学タルコット・パーソンズは、79年急逝し、巨星落つる感を遍く与えた」(新明正道教授)

この悲しいニュースを信じられない気持ちで受け止めながら、私はとり急ぎアメリカの自宅へ電報を打ちました。ところが二週間ほど経て、パーソンズ夫人からお手紙が届きました。その手紙にはミュンヘンにおいて、当日も元気で講演してとこについたが、夜半に心臓の発作に襲われて急逝された模様が書かれてありました。そして「ことのほか主人が日本の関西学院で客員教授として過ごした時のことをとても懐かしんでいた」ということが書き添えてありました。

私は何度もこの手紙を読み返しながらか、言いようのない悲しさと虚しさがこみ上げて来るのを抑えることが出来ませんでした。

パーソンズ教授は若き日にハイデルベルク大学に学び、そこで学位を得たためか、生涯、ウェーバーに惹かれ、ドイツに愛着を持ちつづけていました。関西学院に滞在中にも、翌年五月にはハイ

デルベルグ大学に招かれているが、これは自分のセンチメンタル・ジャーニーだと嬉しそうに話されていました。

愛するドイツの大学で最後まで講演をつづけて斃れたパーソンズ教授の逝去は「インキュラブル・セオリスト」の壮烈な、しかし幸せな終焉であったというべきではないでせうか。

私は社会システム論の一学徒として、晩年のパーソンズ教授に師事することが出来たことを何よりの誇りとするものです。しかも単に理論的なものを学んだだけでなく、深く人格的に触れあいの機会を持ち得たことは生涯の有難い幸せでした。本書は、私がパーソンズ先生へ心からお捧げる鎮魂ミサ曲なのであります。

1981年夏、筆者はカナダ・カウンシルの招きでカナダの諸大学を訪ねた際、パーソンズ教授が永遠の眠りにについているニューハンプシャーの古い教会墓地に参り、教授がいつも仕事をされていた近くの山荘でパーソンズ夫人にお会いしてお悔やみを申し上げた。

そして昨年(1995年)9月再びニューハンプシャーの古い教会にあるパーソンズ家の墓地を訪ねタルコット・パーソンズ先生の墓地に参り、拙訳『社会システムの構造と変化』を墓前に捧げた。ニューハンプシャー州の古い教会のパーソンズ家の墓地は時の流れを忘れたようにひっそりと静まって変わるところはなかった。先生が逝去されて16年、最初の墓参りからでもすでに11年の歳月が流れたにもかかわらず。

そのあとハーバート大学、エマーソン・ホール

の三階にパーソンズ先生の長男、チャールズ・パーソンズ先生を訪ね筆者の訳書をお渡しし昼食を御一緒させていただいた。ところで筆者はチャールズ・パーソンズ先生に会ったとたん、思わずアッと声をあげた。御子息はパーソンズ先生に生き写しであったからである。アメリカ人にしては背がやや低く小ぶとりで着ている背広がまるで同じものであった。チャールズ・パーソンズ先生はハーバート大学出身でコロンビア大学の哲学教授からハーバート大学に移られた記号哲学の教授である。ハーバート大学の教授食堂に招待されて食事をいただきながら筆者が「お父さんと学問

上の話はよくされましたか」と質問したのに対して、「専門は違うけれども、ときどき議論しましたよ」と笑って答えられた。

筆者にとってパーソンズ先生に師事し幸運にも親しく人格的な交わりを持つことが出来たことを生涯最高の宝と思っているものである。

## 〔7〕 M. ゴードン教授とライツ教授 (エスニシティ)

### (1) M. ゴードン (Gordon) 教授

3節のマツチューセッツ大学の項でふれたように、筆者は1966年にM. ゴードン教授の理論社会学のセミナーに参加した。このコースではアメリカ社会学のウォード、サムナーなどの初期社会学、ウェーバー、デュルケーム、ジンメルなどヨーロッパの社会理論を論じ、最近のものとしてレンスキーの *Power and Privilege*, 1966 を詳細に論究した。何ととってもゴードン教授はこの大学を代表する理論社会学者であった。教授の論議は厳密かつ明晰で、しかも熱の入った魅力的な講義をされた。ゴードン教授はコロンビア大学でロバート・マッキーバの指導を受けた社会学者で、その業績は著書だけに限っても、

① *Social Class in American Sociology*, 1950.

② *Assimilation in American Life*, 1964.

③ *Human Nature, Class, and Ethnicity*, 1978.

④ *The Scope of Sociology*, 1988.

があり、階層とエスニシティに関する著名な理論家である。

筆者はゴードン教授のセミナーに属したことによって二つの収穫を得た。その一つは教授の著書 *Social Class in American Sociology*, 1950 中のシカゴ学派の批判を学んだことである。筆者はシカゴ学派の業績をまずゴードン教授の目を通して理解したわけである。そのことは拙著『都市化の社会学』法律文化社 1970 に述べた。

筆者はその後、パーク等の論文集 *The City*, 1925 を大道先生と共同で翻訳したが、そのオリエンテーションはゴードン教授を通して与えられたものである。

ゴードン教授に学んだ第二の収穫はレンスキー

の権力理論である。レンスキーは社会階層形成の理論を「機能主義理論」と「矛盾論」を統合することによって構成しようとしている。その理論的特質は「権力」を配分の基本変数としながら特権と威信に発展させている点など極めて斬新なものであった。このようにしてレンスキーの理論をゴードン教授を通して学んだ。その成果は同じく拙著『都市化の社会学』の中に取扱っている。

以上の二点は30年前にゴードン教授を通して学んだことであり、帰国後に出版した拙著の中に取入れたものであった。しかし筆著は近年「エスニシティ」に関心を抱き、改めてゴードン教授のエスニシティの理論を学んでいる。教授はこの分野では最もすぐれた社会学者としてよく知られている。日本のエスニシティの研究者もほとんどの人がゴードン教授の理論に言及している。

ゴードン教授は *Assimilation in American Life*, 1964年の中で、同化の過程を、①Anglo-Conformity、②Melting-Pot、③Pluralism に分け、その重点が①から②を経て③に向かうことを示唆し、文化多元主義を理論づけている。このような同化過程の分析はアメリカのエスニック研究における画期的な業績であった。

教授はまたアメリカの社会構造を規定する要因としてエスニシティと階級が結合した複合体「エスクラス」という概念を創り出している。この概念はアメリカ社会を分析するのに有効な概念としてエスニシティの研究家に評価されている。

このようにゴードン教授はエスニシティに関する社会的一般理論の構築を目指す理論家として第一人者の地位にある学者である。

### (2) J. G. ライツ (Reitz) 教授

ライツ教授はコロンビア大学でマートン教授とラザーツフェルト教授のもとで学位をとりトロント大学で教えているエスニックのすぐれた研究者である。筆者は1982年から83年にかけてトロント大学に研究員として滞在している間にトロント日系コミュニティの研究を進めるに当たって理論的な指針として最も大きな影響を受けたのがライツ教授の

*The Survival of Ethnic Groups*, 1980

であった。当時、ライツ教授とは面識もなく何も知るところはなかったが、この著書から日系コ

コミュニティの調査をすすめるのに重要な指針を得ることが出来、また調査データの整理にも有効であった。

多くのことを学んだが、殊に、①エスニックに関する古典的なヨーロッパの社会学者の研究、アメリカ社会学、カナダの社会理論についての見解、②各集団毎の社会経済的格差の実証的研究、③エスニック集団凝集性の規定要因について多くの示唆を受けた。

筆者の近著

『北米都市におけるエスニック・マイノリティ』ミネルヴァ書房 1997年

の理論的基礎はライツの研究業績に負うところが大きい。

このようなわけでライツ教授の理論に影響を受けたので、1995年に彼の *The Survival of Ethnic Groups* を

『カナダ多民族社会の構造』(晃洋書房)として翻訳した。

## むすび

これまで述べて来たように、大道安次郎先生、竹内愛二先生、J. H. コーソン先生、T. O. ウィルキンソン先生、ゴールデン教授、ヨーキー教授、ビッシヤーズ教授、デューイ教授、ファーバー教授、パーソンズ教授、ゴードン教授、ライツ教授について親しく教えを受け、そしてまた人生の師として深い英知を学ぶことが出来た。

これらの多くの先生方に国境国籍を超えて、同じ学問研究に携わる同学の上として温かい交わりをいただいたことを大いなる幸せと思っている。

## “My academic career at Kwansai Gakuin University”

### ABSTRACT

Since I entered the Department of Sociology in the School of Humanities at Kwansai Gakuin University in 1951, I studied various subjects under a succession of professors.

Professor Yasujiro Daido taught me sociology, and Professor Aiji Takeuchi taught me community development at Kwansai Gakuin University. At the University of Massachusetts, I studied urban sociology and population studies under Professors T. O. Wilkinson and H. Golden. Also at the University of Massachusetts, I studied ethnicity under Professor M. Gordon.

Based on this academic background, I taught and did research in urban sociology, population studies and ethnicity for 37 years at Kwansai Gakuin University. I also published books and articles on these topics.

**Key Words** : Urban Sociology, Population Studies, Ethnicity